授業研究会に寄せてⅢ

認知の仕組みと授業改善

2018．11．07
No.38
校長　渡邉　幸二

今日は３つの授業が提案されます。普段、私たちは、特別支援学級でどんな授業が日々展開されているか知りません。マイスターのＥ先生が時たま伝えてくださる情報を通して知るしかないという状況です。そのマイスターレポートによれば、知的障がいのある３人による学級においても、学びの共同体が確かに出現しているとのことでした。もちろんそれは、担任の先生のチャレンジ・提案性があればこそだと思います。

「学びの共同体」とは？

ちょっと前、「アクティブ・ラーニング」や「探究的な学習」という言葉が出始めのころ、その説明を聞いた先生方に「それってどういう授業？」「具体的に教えて！」と言われた覚えがあります。どういう型の授業なのかを知ることで、そういう授業ができると思い込んでいらっしゃったのかもしれません。私は

先生はどういう授業だと思いますか。

と訊くようにしていました。そもそも探究型学習には「型」はないのです。われわれ自身が、アクティブ・ラーニングを重ねそれらを知り、自分に合ったアクティブなラーニング方法を体得していくしかないと思うのです。そんな質問をする受け身の先生はもちろん答えられません。「学びの共同体」についても全く同じことが言えます。

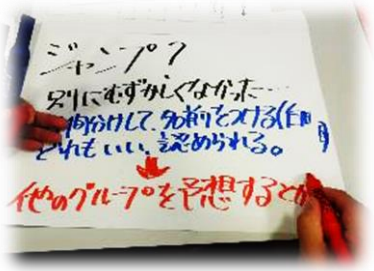
慶応義塾大学教授の今井むつみ氏は言います。(「教職研修 2018.11号」巻頭言「**『認知科学』から考える、ＡＩ時代の『学び』**」より)

･･･「生きた知識」は、誰かに教えてもらうものではありません。**自分で探すもの**です。赤ちゃんも、言葉一つひとつの意味を誰かに教えてもらっているのではなく、自分で探し、獲得しています。だからすぐ使うことができるのです。

また「生きた知識」は、目の前の課題解決だけでなく、**新たな「知識」を創造するために使う**こともできます。新たな「知識」はゼロからは生まれません。すでに知っている「知識」を組み合わせることで生まれます。これが想像力の源なのです。

今井氏はさらに“**「主体的･対話的で深い学び」のカギ**”という柱立ての中で、次のようにも述べています。

「知識」がないと人は学べません。知識のシステムを構築するためには、広がりと深さのどちらもが必要です。そのためには、まず**学校は「知識を覚える場」ではなく、知識を使う練習をし、探究をする場となるべき**です。知識を使う練習とは、持っている知識をさまざまな分野で**どんどん使い、それによって新しい知識を自分で発見し、得ていくということ**です。それこそがＡＬの本質です。



今本校で取り組んでいる**「ジャンプの課題」**は、もしかするとこの「知識を使う場」に相当するのではないかと思います。

今井氏は続けます。

協働的に学ぶことも、認知科学にはとても意味があります。そもそも社会では、一般に私たちは必ず他の誰かとやり取りを行っていますね。

ただ、うまく協働するためには条件もあります。やみくもに人が集まれば、一人ではできない何かが生まれるわけではありません。協働するためには、一人で考えることも疎かにしてはなりませんし、自らの思考を客観的に把握し認識することも必要になります。

最後に**“ＡＩ時代の教師に求められること”**の中では、次のような示唆をわれわれに与えてくれました。

ＡＩは少し過大評価されていますね。ＡＩは自動ピアノのようなものです。人はなぜ、自動ピアノがあるのに、わざわざピアニストの演奏会に行くのでしょうか。それは、ピアニスト独自の個性があるからです。

曲にはもちろんそれぞれの弾き方が細かく定められています。ですが、いつも教科書どおりの演奏をしていては、聴いている方はつまらない。ピアニストは、伝統に忠実に演奏するけれども、ホール、時間、観客などに応じたその一瞬の演奏をします。そこが違うのです。

これと同じことが教師にも言えます。**教科書どおりに教えるのか、目の前の子どもたちのその一瞬に合わせて授業をするのか。**

子どもが必要とすることは一人ひとり違います。子どもの興味や反応も一瞬時に変化します。教科書を無視するわけではなくても、その一瞬にしかない場面が教室にはありますね。教師が想定していなかった子どもの発言を、無視するのか、それともそこから展開させるのか。

そこが、子どもの気持ちに火をつけるかどうかの境目です。子どもが「学びたい」と思えるように、子どもの気持ちに火をつけることが、先生方のこれからの役割ですから。

（引用文内の太字、下線は校長）

私は先日の職員会議で、先生方にこう申し上げました。

「一歩踏み出さなければ失敗も、反省も、改善も、新たなる進化もありません。」

と‥‥。授業研究会は、授業をする先生の提案（プレゼン）です。この学校研究を通じて、提案者の挑戦があるべきです。「うまくやろう」とか「上手に流そう」という発想のものではないはずです。学びの共同体に向けて、その先生なりの提案があるべきだと思っています。今日の授業も、そういう意味で楽しみです。

The mediocre teacher tells.
The good teacher explains.
The superior teacher demonstrates.
The great teacher inspires.

凡庸な教師はただしゃべる。
良い教師は説明する。
優れた教師は自らやってみせる。
しかし偉大な教師は心に火をつける。

アメリカの教育者、ウィリアム･アーサー･ウォードの名言